

# 

——宇井黙齋「朱易衍義」関係の「抄物」を中心に——

塚 本 泰 造

## 

Taizō TSUKAMOTO

### 

本稿で取り上げる崎門学派の講義筆記・講義案類(以下、資料の成り立ち方が室町時代の抄物に似ているので、崎門学派「抄物」<sup>1)</sup>と仮称する。「抄物」とした場合は、崎門学派のものをさす)は、たとえば、

1. 講義という場面の制約はありながら、その筆録がかなり講師の話し方を忠実に写そうとした物であり<sup>2)</sup>、何らかの当時の口語の反映がみられること
2. 学派が全国的に分布しており<sup>3)</sup>、したがってその筆記も江戸や上方にのみ偏った分布を見せず、当時の方言体系が反映され得ること<sup>4)</sup>
3. 基本的に「抄物」は武士と武士とが対峙した場面で使われた言語であって、文芸作品と違って武士階級のための単一位相の資料と見なされること
4. 口語・俗語を交えた他の学術の表現(漢籍国字解・俗言解・仏教講義類など)とともに、あるジャンルの文体史上の資料でもあること

など、近世の日本語、特に従来資料の不足が指摘されていた近世後期上方語や武士階級の言語を解明していく上で、また現代共通語の基盤となった可能性のある江戸期教養層の言語<sup>5)</sup>の実態を知る上で貴重な寄与をなす資料群であると思われる。しかしながらこうした写本類の目録は完備しているとは言いがたく、日本語の資料として十分に活用されていないというのが現状であろう。基本的な考察の積み重ねもまた求められているのである。

<sup>1)</sup>近世後期、いわゆる「漢籍国字解」とはまた違った文体を示していくように思われるので「抄物」ともした。

<sup>2)</sup>中村幸彦「近世語彙の資料について」(『国語学』87, 昭和46年12月)

<sup>3)</sup>笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究 上下』(吉川弘文館, 上:昭和44年3月, 下:昭和45年7月)に詳しい。

<sup>4)</sup>拙稿「近世学術の中の「ておる」——崎門学派「抄物」の国語史的価値——」(『筑紫語学研究』第4号, 1993年12月)参照のこと。

<sup>5)</sup>一般的な意味での「教養層」である。

本稿では「抄物」の待遇表現のいくつかの焦点を合わせ、近世語・武士階級の言語の実態にいくらか付け加えをしてみようと思う。というのも講義という場面では、およそ以下の二つの話題の場が考えられるからである。

1. 先人の説の紹介・批判・補足（話題1とする）

2. 先人の説を説明する際に必要となったエピソード・事情の紹介（話題2とする）

1の場合であれば、講義というあらたまった場面においてそこには先人に対する敬意が常にあるはずであるから、資料に限られてはいても待遇表現を構成する言葉が量的に不足することは考えにくいし、2の場合、講師がその話題の登場人物の立場になって何らかの会話を再現するならば、そこには講義という枠から離れた、当時の（武士の）普通の会話が再現されているはずだからである。そしてこの会話の中に現れる待遇表現（敬意を含まない対等の立場の場合の表現もある）が、より直接的に武士の言葉を反映していると見てよいであろう。つまるところ、待遇表現に二つの層があり得るわけである。

具体的な資料としては、崎門学派の中で三宅尚斎門にあたる旧高鍋藩校明倫堂文庫蔵の、宇井黙斎の講義を筆録したもののうち、以下の二書を取り上げる<sup>1)</sup>。

『宇井子朱易衍義講説』

（目録番号1491-12<sup>2)</sup>。奥書によれば明和3年1766成立。3巻2冊，上中128丁・下72丁。千手興欽録。以下『講説』と略称する）

『宇井子全書朱易衍義講義』

（目録番号1487-12。本文の記載によれば安永8 1779年成立。3巻3冊，墨付上49丁・中140丁・下71丁。書写者不明。上中と下とは別筆。ただし千手興欽はこの取り合わせ本を参照し、『宇井子朱易衍義講説』に書き込みを行っている。また以下に述べる待遇表現に関しては、上中と下とで言語上の差異は見出しがたい。以下『講義』と略称する）

これら朱子の『朱易衍義』の注解は、宇井黙斎の「抄物」のうちで最も古い年代明記を持ち（『講説』），しかも近世後期にあたり、また抄物でいえば『講説』は「聞書」「他抄」にあたり、『講義』は「手控」「自抄」にほぼ相当するものであって<sup>3)</sup>，この手控と聞書とが一揃いに在ることは、国語資料としての「抄物」を取り扱う上で、その言語の基礎的な考察を行うのに有効であると思われるのである<sup>4)</sup>。

いまだ待遇表現「体系」の解明まで及ばぬ一実態報告にすぎないが、国語資料として「抄物」を

<sup>1)</sup> 明倫堂文庫蔵宇井黙斎の「抄物」については平澤氏の以下の論稿がある。氏が宇井黙斎述の中で取り上げられたのは『宇井子朱易衍義講説』『易学啓蒙』『詩経講説』『易经講義』『書経集伝』である。

平澤 啓「明倫堂文庫蔵 宇井黙斎（崎門学派）の講義筆記の言語」（『宮崎女子短期大学紀要』第12号，昭和61年3月）

「明倫堂文庫蔵 宇井黙斎（崎門学派）の講義筆記の言語（II）」（『宮崎女子短期大学紀要』第14号，昭和63年3月）

「用例集 日向高鍋藩校「明倫堂」の講義ノートの語法」（森岡健二編著『近代語の成立 文体編』第一部II第三章，明治書院，平成3年10月）

<sup>2)</sup> 『高鍋藩 明倫堂文庫図書目録』（昭和59年8月）による。

<sup>3)</sup> 詳しい書誌的説明は以下の拙稿に譲る。

「崎門学派「抄物」（旧高鍋藩明倫堂文庫蔵）の位置付けについて——宇井黙斎の『朱易衍義』関係の「抄物」を中心に——」（『筑紫語学研究』第3号，1992年12月）

<sup>4)</sup> また実際に待遇表現においては手控と聞書との言語上の差が認められた。

活用する際、何らかの指針ともなれば幸いである。

## 2. 調査結果

『講説』『講義』ともにその待遇表現の基調をなしているのは、以下の数値が示すように助動詞「ル・ラル」「レル・ラレル」である<sup>1)</sup>。しかしながらまた、手控と聞書との言語体系の違いも、こうした待遇表現の用例数及び種類の差にはっきりと認められると言ってよいであろう（代名詞については後述）。

	『講説』	『講義』
ル・ラル・レル・ラレル	4 9 9 例	3 1 0 例
～玉フ（給ふ）	0 例	1 0 1 例
御～ナサル	3 2 例	1 例
御（～アル）	3 7 例	4 例
（～）ナサ（レ）ル	2 2 例	1 9 例
（御～）下サル	4 例	1 例
～テ下サル	2 例	0 例
テゴザル・デゴザル	5 例	0 例
イタス	1 例	0 例
マス	1 例	0 例

特に話題1に「ル・ラル」「レル・ラレル」が使われやすいようである。たとえば、以下のような例が端的に示す。

ソコテ朱子ノキラワレテ邵子ノ本意トチカヘテ説ヲ立ラレタ<sup>カ</sup>也…邵子ノ旨ニチカヘテ説ヲ立ラレタ<sup>カ</sup>也邵子ノ語ヲ本文ニヨ一字モカエスニ説ヲ立註ヲセラレタケシカラヌ手際ナ<sup>カ</sup>ソコレヲ邵子ニ見セタナラバサソ喜ハル、テアラフゾサテモヨク説直<sup>カ</sup>クレラレタアマリ快ニ過キテカエツテ作為ニチカイユヘ文字ヲカヘヤフト思タニ朱子ノ註テ文字一ツカヘスニ精微ニナツタ<sup>カタジケ</sup>忝ナヒト云ハル、テアラフ

（『講義』中85オ～ウ）<sup>2)</sup>

話題2にあたる「ト云ハル、」より前の引用部分・会話部分には、「ル・ラル」「レル・ラレル」が見られない。

また、明らかに「レル・ラレル」と判断されるもの、すなわち「～レル」の形を取るものが『講

<sup>1)</sup> まだ全文が翻訳されていない文献でもあるので、末尾に「ル・ラル・レル・ラレル」を除いた用例表を掲げる。ただし「～レル」の形を取っているものは、論旨の都合上、表に示している。

<sup>2)</sup> 『講説』『講義』ともに濁点は文脈まかせに付けてある。

説』のみに35例<sup>1)</sup>見えることから、聞書『講説』の方がよりくだけた・口語性の高い資料であると言えよう。「～玉フ」が『講義』のみ見られることもこれを裏付けている。

さらに語彙的対立をなしているのは、「言う」に関わるものであった。

	『講説』	『講義』
仰ラルル	2 8 例	1 例 <sup>2)</sup>
仰ツカハス	2 例	0 例
ノ玉フ	0 例	2 4 例
申述ル	0 例	1 例

また反対に共通するものは「思召（ス）」（名詞・動詞も含む）であった。これは武士の間でよく使う言葉であったと思われる。

	『講説』	『講義』
思召（ス） <sup>3)</sup>	1 4 例	1 1 例

山崎久之氏は江戸前期から後期にわたる上方語の待遇表現体系を、称格を基準にして主に代名詞とその述部との特定の呼応関係から5段階に分けられた<sup>4)</sup>。しかしその立論の根拠となった資料は歌舞伎・浄瑠璃・浮世草子・洒落本が主であって、武士の言葉に関しては氏自らが言われるように「いわばこれは、町人文学に現れた武士ことばの体系である」<sup>5)</sup>。氏はまた近世の文語についても範囲を広げられたが、依拠する資料は同種であった<sup>6)</sup>。

そこでこの武士による武士の言葉から成る二種の「抄物」の待遇表現を構成する諸表現を、山崎氏の五段階に当てはめてみれば、ほぼ町人の第二段階（特に江戸前期）に相当する。ただそうした時にはこの「抄物」は「ル・ラル・レル・ラレル」を基調とし、「～遊ばす」や「～しやる」を含まないところに特色が認められる。また「～玉フ（給ふ）」が硬い表現として『講義』にのみ見られ、「御～ある」という待遇表現が、江戸時代では「待遇価値の凍結又は化石化」を起こし「対称他称とも最高待遇価値をそのまま伝え」て「文章語として」あるいは「形式的な晴のことば（公式語）として」使われたと山崎氏が述べられている<sup>7)</sup>にもかかわらず、口語性の高い『講説』ではいわば生き生きと使われているのである。少なくとも第二段階という幅が幾分大まかであるとは言えるであろう。「抄物」の活用が進めば、山崎氏の立てられた五段階の細分化、あるいは武士階級の待遇表現体系との相違がより明らかになるとと思われる。

<sup>1)</sup> 末尾の表参照。

<sup>2)</sup> 表記の上では「ヲヲセラレシ」（上35ウ）である。

<sup>3)</sup> その他『講説』に「思召チガヒ」（上55オ）がある。

<sup>4)</sup> 『国語待遇表現体系の研究 近世編』（武蔵野書院，昭和38年4月）

<sup>5)</sup> 『国語待遇表現体系の研究 近世編』（武蔵野書院，昭和38年4月）514頁。

<sup>6)</sup> 「文語における主体待遇の助動詞・補助動詞」「文語における対称代名詞の待遇的研究」『統国語待遇表現体系の研究』（武蔵野書院，平成2年2月）

<sup>7)</sup> 「お＝ある」「お＝やる」「やる」の変遷——近世待遇語の変化の傾向——」『統国語待遇表現体系の研究』（武蔵野書院，平成2年2月）62頁。

もちろん講義という場面がそのような敬意の高い段階にあり、品のない言葉を避ける傾向があったのも確かであろうが、その敬意の度合いは武士階級から見た待遇表現体系の段階でなければはかれないのである。

### 3. 話題2から——特に代名詞について

話題1の代名詞には御自分・御自身があり<sup>1)</sup>、山崎氏が武士ことばとして指摘される点に矛盾しない。

話題2には話題1よりも代名詞が現れやすい。まず対称として「ソコモト」が挙げられる。

#### 『講説』2例

若執此説——此以下ハソコモトノ説ヲツテ説ケハ必コウナルト朱子ノワル口也

上中65ウ

ソコモトノ智明ナルノニ邪マニナリメンドウカケテケガスヲヲセント也

上中66ウ

#### 『講義』1例

邵子キモヲツブシテソコモトハドフソノヤウニ聡明ナルゾト稱セラレタ

上33オ

この三例は、山崎氏が「ソコモト」を武士言葉として指摘されるのに矛盾しない。しかしそれが第二段階（文化頃は第三段階）にあたる<sup>2)</sup>のかどうかは疑問である。上への待遇表現が述部に全く見られないからである。「ソコモト」は対等関係の武士と武士との間で使われ、手控・聞書双方に見えるような武士階級の一般的な対称代名詞だったとも考えられる。

「ソコモト」に対する自称として「ヲレ」が挙げられる。

#### 『講説』4例

コレヲ文王ニ見セタナラヲレハ其説ハ知ラヌガ丘（注：孔子のこと）ガ説クモ尤ジャト云ハレヤウヲ也

上中75オ

此レヲレガ咄ヲ認メアマリタノジャソウ云フデハナヒト也

上中79ウ

ヲレハ其時分ノ本分本トノモチマヘニ付テ説クト也コ、ガ朱子ノ格別ナル処也

下29オ

朱子ノ易ノ注解ノヲ此説ト云ヲレガ此ノ説ハ誰ニ聞タデモ無ク吾ガ見タ所デ説レタガ後人ドウ思フデアラフカト仰ラレテ…

下71ウ

<sup>1)</sup> 末尾の表参照。

<sup>2)</sup> 『国語待遇表現体系の研究 近世編』（武蔵野書院，昭和38年4月）627～630頁。

いずれも述部には待遇表現が見られない。

時代はやや下るが、学術の表現の中で同じ俗語・口語を交えた国学者の俗言解と比較してみよう。永田信也氏は武士の言葉を使って訳をする場合『古今集遠鏡』では、対称の代名詞としてはその対象がはっきりしているものには「貴様」(27例)、はっきりしないものには「そこもと」(7例)、そして自称の代名詞として「貴様」に対するものに「拙者」(12例)、『古今和歌集鄙言』では「貴様」は見えずに「そこもと」(42例)と「おれ」(99例)との対応がほとんどで「そこもと」—「拙者」という対応は2例しかないことを指摘されている<sup>1)</sup>。この違いを永田氏は「宣長と雅嘉の社会環境の差によるもの」で「一方(注：宣長のこと)は武士詞を位相として把へ、それを俗言解の中に一つのグループを成すやうに利用させ、他方は位相としてでなく、その持つ語感だけを利用させることになったのではないかと推察されているが、二種の「抄物」からはかえって『古今和歌集鄙言』の著者尾崎雅嘉の方が正しいと思われるのである。宣長のボキャブラリーの豊富さが必要以上に使い分けをさせてしまったと考えるべきではないであろうか。

その他、武士言葉について補足となることを指摘しておく<sup>2)</sup>。

- ・命令形「下され」には『講説』に「下されい」(3例)
- ・話題1には「デアル」が見え、それに応ずる話題2には「デゴザル」(2例)
- ・『講説』の話題2に「マス」が1例

猶更深考テ論シマセフト也コ、ハサスガ南軒ジャ

上93オ

#### 4. 終わりに

他の崎門学派の「抄物」とは比較していないので、あくまでも推測の域を出ないが、ここまで論じてきたことをまとめてみると、

1. 待遇表現に着目することで「抄物」の手控と聞書の言語上の差違を見出せる。
2. 文芸資料から推測されていた武士言葉の実態を修正するのに「抄物」は有効である。ここでは待遇表現に注目し、「る・らる・れる・られる」が基調であること、「御〜ある」のような石化されていると思われた言葉が口語性の高いものとして使用されていること、述部に待遇表現を伴わない武士の一般的な代名詞に「ソコモト」—「ヲレ」の関係が見られることなどを指摘した。

最後に、調査対象は現在翻刻されていないものであるもので、待遇表現の用例表を示して終わりとする。

〈末筆ながら貴重な資料の閲覧など終始御援助を賜りました岩村進図書館長をはじめ、高鍋町立高鍋図書館の皆様に深く感謝を申し上げます。〉

〔1993年12月10日受理〕

<sup>1)</sup> 『『古今集遠鏡』と『古今和歌集鄙言』の人称代名詞——俗言解における訳出の異同から——』（『国語国文学研究』73, 昭和60年3月）

<sup>2)</sup> 末尾の表を参照のこと。

講説

レル・ラレル

笑ハレル	上中 2 ウ
書レル	3 オ
作テヲカレル	5 オ
復ヘサレル	12ウ
説レル	21オ
ヨラレル	23オ
説カレル	28ウ
観ラレル	42オ
観ラレル	42ウ
説レル	57ウ
説カレルケレドモ	61オ
説カレル	63オ
疑ハレル	66ウ
従ハレル	68ウ
画セラレル	70オ
説カレル	73ウ
説カレル	74ウ
説カレル	76オ
トラレル	78ウ
説レルカラ	79ウ
説キヌカレル	85オ
作ラレル	88ウ
説レルカラ	96オ
云ハレル	99オ
カケラレル	120オ
引レル	下 2 オ
説レル	7 オ
作ラレル	9 オ
明サレル	11オ
云ハレル	19ウ
説カレル	29ウ
説カレル	35ウ
聞レル	59ウ
聞レル	59ウ
説レル	60オ

御

御合点	上中 1 ウ
御存知	3 ウ
御存知ナヒ	3 ウ
御存知	3 ウ
御自退	9 オ
御合点	18ウ
御覧ナカリタ	19オ
御自身	23オ
御手ズキ	38ウ
御称美	65オ
御存ナキ	70オ
御合点	70オ
御存無ク	70ウ
御合点	72ウ
御合点	73ウ
御合点ナヒ	86オ
御書翰	89オ
御尤ナ	93ウ
御物語	115ウ
御自分	下 23ウ
御門	24オ
御自分	29ウ
御存デアラウ	49オ

御言	49オ
御合点	52オ
御合点ナキ	52オ
御存シ	52オ
御存	57オ
御存	57オ
御自身	58ウ

御〜アル

御疑アレバ	上中 2 ウ
御覧アレバ	19オ
御覧アレカシ	49ウ
御歎息アリタ	70ウ
御得心アルマイガ	86オ
御吟味アル	103オ
御吟味アリ	104ウ

御〜ナサル

御取りナサレタガ	上中33ウ
御説キナサレタ	58オ
御説キナサレ	59ウ
御説キナサレ	59ウ
御覧ナサレタ	60オ
御説キナサレタ	63オ
御説キナサル	67ウ
御説キナサルレドモ	72ウ
御説キナサレヌカ	72ウ
御覧ナサレタ	73オ
御説キナサレテ	74ウ
御説キナサルカラ	75オ
御説キナサル	75オ
御書キナサル	81オ
御トリナサレタ	89ウ
御説キナサレタ	94ウ
御説キナサル	103オ
御説キナサレタル	107オ
御説キナサレテ	114オ
御覧ナサレタ	下 22オ
御説キナサル	24オ
御説キナサレタ	24オ
御覧ナサル	29ウ
御説キナサレタガ	31オ
御トキナサレタ	33オ
御トキナサレヌ	49オ
御覧ナサレタ	58ウ
御覧ナサレタ	58ウ
御覧ナサレタ	58ウ
御説キナサル	62オ
御語りナサレタ	62ウ
御覧ナサレテ	68オ

ナサレル・ナサル

証拠ニナサレタ	上 12ウ
尤トナサル	15ウ
ナサレタ	23オ
吟味ナサレタ	41オ
イロイロナサル	43ウ
非トナサレタ	55オ
ナサレタ	59ウ
ナサレタ	75オ
ナサレタ	79オ
ナサルレドモ	80オ
ナサレタ	80オ

成就ナサレヌ	88ウ
ナサレタ	下 2 オ
ナサレタ	18ウ
ナサレヤウ	30ウ
ナサレタ	30ウ
ナサレテ	33ウ
ナサレタル	33ウ
ナサレタ	39ウ
ナサル	51ウ
ナサレタ	51ウ
ナサレタ	66ウ

御〜下サル

御免下サレイ	上中37ウ
御出下サレテ	49ウ
御ギンミ下サレイ	49ウ
御考下サレバ	71ウ
考テ下サレイ	86オ

〜テ下サル

見セテ下サレ	上中47オ
書テ下サレタ	79オ

仰セラレル

仰ラレタル	上中11ウ
仰ラレタル	11ウ
仰ラレテ	30ウ
仰ラレタル	41オ
仰ツカハサレタ	55ウ
仰ラレテ	61オ
仰ラレタ	71ウ
仰ラレヌ	73オ
仰ラレタ	77オ
仰ラレヌ	83オ
仰ツカハサレタ	83ウ
仰ラレタ	89ウ
仰ラレタル	109オ
仰ラレタ	114オ
仰ラレタル	115オ
仰ラレタ	118ウ
仰ラルル	下 18オ
仰ラルル	18オ
仰ラレタ	30オ
仰ラレタル	31オ
仰ラレテ	31ウ
仰ラルル	33ウ
仰ラレタ	35オ
仰ラレタ	39オ
仰ラレタ	39オ
仰ラレテ	49オ
仰ラレテ	60オ
仰ラレテ	61ウ
仰ラレテ	71ウ
仰ラレテ	72オ

思召（ス）

思召チガヒ	上中55オ
思召テ	63オ
思召テ	67オ
思召	92ウ
思召	108ウ
思召	110オ
思召タカ	下 9 オ

思召タニ	9 オ
思召カラ	18オ
思召タ	35ウ
思召	49オ
思召アル	51ウ
思召サヌ	52ウ
思召デ	58ウ
思召	72オ

イタス

合点イタシタ	上中90ウ
--------	-------

テ（デ）ゴザル

無調法デ御ザル	上中37ウ
待テゴザル	42オ
皆元亨利貞デゴザル	115ウ
スナドリヲシテゴザリタ	下 8ウ
説ズニゴザリテ	9 オ

マス

論シマセフ	上93オ
-------	------

講義

御

御文庫	上16ウ
御前	下26オ
御側	26オ
御自身	57ウ

玉フ

発揮シ玉フ	上24ウ
ノベ玉ヘリ	27ウ
ノツトリ玉フ	中 2 オ
得玉ヒテ	7 オ
推玉フ	19ウ
ミ玉ヒ	19ウ
知り玉ヌハ	20ウ
観玉ヒ	46ウ
カケ玉ヒシ	46ウ
見拔玉ヒテ	46ウ
復生シ玉フテ	48ウ
用ヒ玉フ	49オ
シ玉ヒテ	49ウ
脱玉フ	50ウ
解キ玉フ	58オ
憂側シ玉ヒ	60ウ
教エ玉フ	60ウ
キキ玉ハハ	64オ
作り玉フ	65オ
トキ玉ヘル	65オ
シ玉ヘドモ	69オ
ミ玉ヘリ	86オ
戒メ玉フ	104ウ
発明シ玉ヒ	106ウ
発明シ玉ヘドモ	107オ
発明シ玉フ	107オ
発シ玉ヒ	108オ
作り玉フ	113ウ
憂ヒ玉ヒテ	下 1 ウ
シ玉フタル	1 ウ
俯察地理玉フニ	2 オ
ナガメ玉ヒ	3 オ

見玉フ	3オ	譲リ玉フ	66オ
得玉ヒ	3オ	来リ玉フ	69ウ
ナガメ玉フ	4ウ	トキ玉ヒ	69ウ
作り玉フ	7ウ	トキ玉ハ	70オ
居玉ヒシ	8オ	用ヒ玉ヒ	71オ
占玉フ	8ウ		
近改玉フニ	14オ	<b>ナサレル・ナサル</b>	
ナガメ玉ヒテ	14ウ	発明ナサレタ	上21オ
作り玉フ	16オ	発明ナサレタ	21オ
繋ケ玉ヘドモ	16オ	タテナサレタ	32オ
発明シ玉ヘハ	20オ	仰観俯察ナサレテ	中4ウ
述玉フ	17オ	観察ナサルル	6ウ
トキ玉フ	18オ	講究討論ナサレテ	60オ
作り玉フ	21ウ	省関ヲナサレ	64オ
トキ玉ヒ	22ウ	解釈ナサレタ	78オ
ウナツキ玉イ	26ウ	発明ナサレテ	84オ
作り玉フ	27ウ	ナサレタ	84ウ
抛リ玉ヘハ	27ウ	発明ナサレテ	109オ
ミ玉フニ	29オ	ナサレタガ	下10オ
教エ玉フ	29ウ	ナサレヌ	22ウ
教エ玉フ	30オ	発明ナサレタ	34ウ
説キ玉ヘリ	30ウ	珍重ナサレ	47オ
シ玉フ	33ウ	次第ナサレタ	52ウ
トキ玉フ	35オ	ナサレヌ	54ウ
見玉ヒ	35オ	ナサレヌ	57ウ
説玉フ	35オ	喜歡ナサレテ	62ウ
係玉フ	35オ		
発明シ玉フ	35オ	<b>御〜ナサル</b>	
発明シ玉ヒテ	35オ	御免ナサレ	上47ウ
見玉フ	35ウ		
見玉ヒ	38オ	<b>〜テ下サル</b>	
求メ玉ヒテ	46ウ	下サレヨ	上64オ
見玉ヒ	52ウ		
見玉ヒ	52ウ	<b>思召（ス）</b>	
画シ玉ヒ	53ウ	思召タレドモ	中16オ
ミ玉ヘリ	53ウ	思召ガ	20オ
トキ玉ヘドモ	54ウ	思召ヲカル	62オ
掩ヒ玉ハヌ	54ウ	思召セドモ	68オ
シリ玉ハヌ	55オ	思召	75オ
要シ玉ハハ	56ウ	思召	下35オ
説キ玉ハヌ	57オ	思召	48ウ
説キ玉ヒ	57オ	思召	52ウ
説キ玉フ	57ウ	思召	53ウ
教ヘ玉フ	57ウ	思召タル	62オ
告ケ玉フ	57ウ	思召ノ	69ウ
トキ玉フ	57ウ		
教ヘ玉フ	57ウ		
説キ玉ヒ	57ウ		
教ヘ玉フ	57ウ		
仰観俯察シ玉ヒ	58オ		
至リ玉ヒ	59オ		
理会シ玉ハズ	59オ		
切破開示シ玉ヒ	59ウ		
トキ玉ヒテ	60オ		
トトメ玉フ	60オ		
トトメ玉フ	60ウ		
見玉ヒ	62オ		
知リ玉ヒ	62オ		
作り玉ヒ	62オ		
アゲ玉ヒシ	62オ		
ミ玉ハヌ	62ウ		
キキ玉ヒ	63ウ		
定メ玉フ	65ウ		